

2026年6月24日

株主様からの Q&A

・本 Q&A の開示に付きましては、弊社第 23 回定時株主総会におきまして株主様から事前
にいただきましたご質問並びに当日頂きましたご質問とその回答を、ご質問順に開示す
るものです。

・事前質問

1	質問	発行済株式総数の増加の目的と今後の資金調達・資本政策について
	回答	2026年6月15日付開示「第23回定時株主総会議案に関する補足説明」でもご説明の通り、将来の成長機会に対して機動的に対応できる体制を整えるもので、直ちに具体的な新株発行等の資本政策に繋がるものではありません。
2	質問	株式の希薄化及び今後の上場維持について
	回答	株価の状況及び上場維持基準への対応については重要な経営課題と認識しております。今回の発行可能株式総数の引き上げは、将来の成長機会に対して機動的に対応できる体制を整えるもので、直ちに希薄化の影響を伴う資金調達を前提とするものではございません。 上場維持に向けては、パイプラインの進展と提携の実現による企業価値向上が最重要と考えており、責任をもって取り組んでおります。
3	質問	株価低迷の経営責任及び役員の報酬について
	回答	当社の株価の推移については、ご期待に添えない状況が続いていることを重く受け止めております。当社が最も注力してきた軟骨無形成症に対する臨床試験も、皆様のご支援のもと、第3相臨床試験に入り、国内外の多数の製薬企業と提携交渉を進めております。 当社としては、これまでもご説明してきた通り、第3相臨床試験の結果を待たずに早期の導出を目指しており、皆様のご期待に添えるようにしたいと考えております。 また、役員報酬については、会社の業績や事業の進捗状況等と役員の貢献度を指名報酬委員会で評価し、取締役会で真摯に検討してまいります。

4	質問	各パイプラインの優先順位、開発スケジュール、導出に関する計画及び開発費用の調達について
	回答	<p>RBM-007 を用いた軟骨無形成症治療薬の第3相臨床試験につきましては、当社の最優先プロジェクトとして開発を進めております。</p> <p>しかしながら、創薬開発には不確実性が伴うため、単一のパイプラインに依存するのではなく、RBM-006・RBM-011 を含めた複数のパイプラインについて、それぞれの特性や開発段階を踏まえながら検討を進めております。</p> <p>開発の進め方については、全てを自社単独で進めるのではなく、適切な段階での導出や共同開発も重要な選択肢と位置付けております。</p> <p>また、資金調達につきましては、直ちに希薄化の影響を伴う資金調達は考えておりませんが、株式希薄化の影響も含めて慎重に判断し、対応してまいります。</p>
5	質問	RBM-007 又は RBM-006 のどちらで糖尿病黄斑浮腫（DME）の開発を進めるのか、またその判断をいつ実施するのか
	回答	<p>RBM-007 及び RBM-006 の糖尿病黄斑浮腫(DME)を含む開発優先順位については、薬効、安全性、開発コスト及び提携可能性等を総合的に評価しながら検討しており、現時点で特定の方針に固定しておりません。</p> <p>当社としては、限られた経営資源の中で選択と集中を図り、企業価値の向上に資する形で開発方針を決定してまいります。</p>
6	質問	東京大学医学部眼科学教室との研究成果の今後について
	回答	<p>東京大学医学部眼科学教室との共同研究においては、複数のアプタマーについて非臨床段階で有効性を示唆する成果が得られております。特に RBM-006 については、眼圧上昇の抑制、病的血管新生の抑制、抗炎症作用といった薬理効果が確認されており、緑内障や糖尿病網膜症等への応用可能性が示唆されております。また、RBM-006 の作用機序が全く新規であることから、非臨床試験の段階で国内外の企業へライセンス・アウトを目論んでおります。</p> <p>引き続き、研究成果を臨床開発及び企業価値の向上に結び付けることを重視してまいります。</p>

7	質問	2030年3月末までの上場維持基準への対策について また、スタンダード市場への移行の検討について
	回答	<p>グロース市場における時価総額 100 億円の達成は、当社にとって重要な中長期課題と認識しております。その達成に向けては、パイプラインの臨床進捗やデータ創出を通じて価値を高め、導出・提携に繋げることで企業価値の向上を図ることを最優先としております。</p> <p>併せて、創薬支援事業の拡大により収益基盤の安定化を進め、VISION2030のもと持続的な収益を生み出す体制の構築を目指しております。また、IR 活動の強化により、当社の成長性を適切にご理解いただけるよう努めてまいります。</p> <p>なお、上場維持基準の充足状況については注意深く状況の把握を継続しており、引き続き、株価向上に向けた施策を検討しております。</p> <p>市場区分の変更についても選択肢の一つと認識しておりますが、現時点で具体的な方針は定めておらず、今後の事業進展や市場環境を踏まえ最適な対応を検討してまいります。</p>
8	質問	会社の将来的な方向性や見通しについて
	回答	<p>当社の企業理念は「Unmet Medical Needs（未だに満足すべき治療法のない疾患領域の医療ニーズ）に応えること」であり、眼科疾患と希少疾患を重点領域と定め事業を進めております。</p> <p>RBM-007 を上市させることで名実ともにアプタマー創薬企業の地位を確固たるものにすることが可能と考えておりますが、その後もアプタマーを用いた自社での創薬開発（創薬事業）とアプタマーを用いた技術を製薬企業に提供する事業（創薬支援事業）を組み合わせることで、社会に貢献し持続的に事業収益を計上できる創薬企業へと進化していきたいと考えております。</p>
9	質問	西畑氏の選任の適正性について、 また、将来を見据えた取締役候補の選任について
	回答	<p>西畑氏は国内外の医薬品業界における長年の研究開発及び経営経験を有しており、当社においても社外取締役として監督機能を担ってきた実績があります。</p> <p>今回、監査等委員候補とした理由は、貝阿彌氏による法務監査、山本氏による財務監査に加えて、製薬事業特有の内部監査に精通した西畑氏の寄与が大きいと判断したためです。</p> <p>一方で、取締役会の構成については、中長期的な視点から専門性や多様性の確保が重要であると認識しており、将来を見据えた人材の確保については継続的に検討してまいります。</p>

10	質問	代表取締役の後継者問題についてどのように検討しているか。
	回答	代表取締役である社長の後継者計画については、ご指摘の通り当社の重要な経営課題の一つであると認識しており、有価証券報告書においても事業等のリスクとして記載しております。 現時点では、特定の後継者候補を公表する段階にはありませんが、日々、社内候補者の育成や教育、或いは社外の優れた人材に目を配って準備を進めております。
11	質問	第8号議案「資本金及び資本準備金の減少並びに剰余金の処分の件」について
	回答	本議案については、招集ご通知に記載の通り、貸借対照表の純資産の部における勘定科目の振替処理であり、当社の純資産額に変動はありません。

・会場内でのご質問

1	質問	客観的に見た時に当社がかかえているビジネス上の問題点についてどのように考えているのか、一年後着実な成果を出すために、どのような取り組みをしていくのかを教えてください。
	回答	<p>【議長より回答】</p> <p>我々のシーズ（薬の種）は、価値あるものと考えており、それをビジネスに紐づけるという意味では軟骨無形成症（ACH）の臨床試験のプログラムを導出するというのが一番早いと考えております。</p> <p>我々の目的としては、今年度から来年度にかけてそれを実現したい。特に第3相臨床試験の結果で、我々の薬が競合品と比較し、優位性がみられれば、実現可能と考えております。</p> <p>第3相臨床試験のデータが出てくるまでは凡そ一年半程度かかりますが、1年間ぐらいのところでも中間評価をかけますので、凡そ予測が可能となります。</p> <p>現在交渉している製薬企業は結果がすべて揃ってからという企業もあれば、今の段階で優先交渉権を獲得する為にオプション契約をするような可能性を検討していただいている企業もあります。ビジネスという視点で、今の段階では、早期にまとまったライセンスフィーを頂戴できる契約を優先したいと考えております。これを実現させるというところにベストを尽くしております。</p> <p>【安達取締役より回答】</p> <p>現時点の課題と、それをどう解決していくのかという点について、研究開発の立場から回答いたします。</p>

	<p>まず、企業価値という点について、事業収益を継続的に計上していくことを実現する体制を作ることが肝要と考えております。そのために、創薬事業と創薬支援事業という2つの事業に分け、創薬事業では、パイプラインを育ててライセンス・アウトするということを達成することで大きな収益獲得を目指すことに注力しております。また、これまでの課題として、創薬事業はライセンス・アウトまでに、長い年月がかかるため、定期的に細かい進捗をお知らせすることが出来ておらず、積み上げていくような収益化の進捗報告が出来ていなかったのが課題と認識しております。</p> <p>RBM-007 のライセンス・アウトはビジネスの最優先課題として取り組んでいきますが、それに加えて研究開発本部としては、新しく取り組んでいる DDS アプタマー等を中心とした創薬支援事業において、継続的に複数の案件の獲得を目指し、それによって収益構造を安定化させるといったことが課題に対しての取り組むべき方向性と考えております。</p>
--	---